2013 年度秋季人権週間プログラム講演会

日時：2013 年 11 月 27 日（水）　17：00 ～ 19：00
会場：立教大学　新座キャンパス　N431 教室

『おもかげ復元師が見た東日本大震災』

講師　笹原　留似子氏　（株式会社桜代表取締役、復元納棺師）

【笹原氏の自己紹介『私のこと、仕事のこと、先祖のこと』】

岩手県北上市からやってまいりました。本日11時半ぐらいの新幹線に乗り、先ほど到着し、キャンパスを少し見ましたが、日本には四季があって、今は秋ですから、葉の色づいた木々がとてもきれいだなと感じました。

私は普段、納棺の現場、そして復元の現場にいる一人の復元納棺師で、死という現場で生かしてもらっているという職を務めています。死の現場にいると、ご遺族とたくさんお話をしながら、四季折々の中に、一人一人のご遺族との思い出と、亡くなられたご本人との思い出がたくさん浮かんできます。木から1枚の葉が落ちると、そういえば、納棺が終わってから玄関を出てご遺族とお話をしたなというふうに、いろいろなことを思い出す瞬間があります。

東日本大震災後にも四季がありました。春夏秋冬。また、冬を迎えるところで、先ほど沿岸被災地から「とても寒いです」というメールが入りました。今も多くの皆さんからのご支援で、被災された一人一人の皆さんが、今の生活をどうにかしていこうと考えていらっしゃいます。初期の頃からご支援いただいた皆さんもいらっしゃると思います。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。ありがとうございます。

今日のお話の中で、東日本大震災の様々なことを皆さんにお伝えできればと考えています。プロフィールからお伝えしますと、私自身は北海道札幌市で生まれ育ちました。父が北海道の人で、母は岩手県花巻市という、宮沢賢治の生誕の地ですが、その花巻市の山奥のお寺の娘で、母はお坊さん、僧侶です。ご先祖様が山伏という修行者であったことで、小さい頃から山伏というのは、いろいろなまちづくりのなかで中心になった人物だったと聞いていました。私の会社は「桜」という名前ですが、この名前もご先祖様の活躍の中からいただいている名前です。

桜という木をとりましたが、私の母方の山伏であるご先祖様は、花巻の山奥から奈良の吉野のお山に修行に行ったそうです。吉野の山中で、山伏たちが全国から集まって、修行中に野垂れ死んでしまう人たちがいたそうです。私のご先祖様の中にも何人かが、奈良の吉野の山で生涯を終えていると、小さい頃はよく聞いて育ちました。仲間の山伏さんが、穴を掘って亡くなった私のご先祖様の遺体を土に埋めてくれたそうです。土に埋めた後に、お経を上げ、そして近くの桜の木の枝を折ってお墓にしてくださった。日本は、古くから樹木葬、それはお墓と言われているものですが、石になる前は木がお墓の役割だったという時代があったそうです。樹木葬で選ばれる木は桜の木で、桜の木は供養の木と呼ばれています。会社を立ち上げるときに、いろいろなことを思いながら、やはり桜にしたいなと思いまして、株式会社桜という名前を、ご先祖様の活躍の中からいただきました。

小さい頃は、キリスト教の日曜学校に通ったり、神社の巫女さんをしたり、また母がお坊さんだったことで、いろいろな宗教を勉強しろというのが母の教えで、昔から日本に伝わる宗教を学んでいました。その中で、たくさんの死生観と出会います。どうして人は生きているんだろう、どうして人は死んでしまうんだろうというところを、随分小さな頃から考えていたと思います。

日本が飢餓に苦しんだ時代には、ご先祖様の山伏たちが、道端で亡くなっている人たちの遺体を集めて、川で洗い清めた後に、むしろをかけて、火をつけて、感染防御ですね、感染が連鎖しないように焼いたという話を聞いています。私が、亡くなられた方のそばにいさせていただいて、お一人お一人の人生に出会えることで、何となくご先祖様が見てきたことを少し感じられているかなと今は考えています。

【東日本大震災での復元ボランティア】

東日本大震災では、復元ボランティアという活動をさせていただきました。『おもかげ復元師』という本の中にも書きましたが、一番最初に陸前高田の町を見たとき、高いがれきが津波によって作られていました。岩手県はリアス式海岸という特徴を持ちます。ぼこぼこの沿岸地域で、津波が右と左と真ん中から入ってきたという話を、現地の人から安置所の中でよく伺いました。町は津波によって大きな洗濯機状態になり、私の知っている町は、もうそこにはなくて、鉄筋の枠組みだけが建っている状況になっていたと思います。

がれきの間から、亡くなった人たちが見えます。何度も出そうとしましたけれども、到底重たいがれきはどけられませんでした。これだけたくさんの方が亡くなっているのなら、きっと安置所があるだろうと思って、まるで町がなくなっている状態の中で、道端でたき火をしているお父さんたちに声をかけて、「安置所はありませんか」と伺いました。「あるよ」と教えてもらって、一番近くにあった安置所にすぐに向かいました。そこでは、お棺には入れられていないで、シーツにくるまれたりして、たくさんの人が安置されていました。

長く復元納棺師をしていますが、私自身も初めての経験でした。その中に３歳ぐらいの女の子の遺体がありました。町の中を歩いているときに、家族の名前を呼んで、泣きながら歩いている人たちがたくさんいました。この子のご家族も、きっと必死で探しているんだろうなと思いました。「彼女をもとに戻したい」と警察官に言うと、「まだ身元不明だから、誰も触れないんです」と教えてもらいました。

私たちの立ち位置では、身元を確認した後、ご家族の許可がないと、亡くなった人には触れることができません。その子もまだ身元不明と書かれていましたので、私たちは触れることができませんでした。プロになって、こんなに悔しい思いをした経験は初めてでした。ショックを受けると涙も出ない、言葉も出ないという経験を初めてしたと思います。その子の前に立っていると、自分の小ささがよく分かりました。自然が起こしたことに対して何もできない自分がいるんだと思いました。その子はちゃんと三途の川を渡れただろうかと心配でした。

その子を見つめながらぼーっとしていると、一本の電話が鳴りました。あのアンテナのない状況の中で、よく携帯がつながったなと思いますが、その電話の向こうでは、せっぱ詰まった状態で、高校生の子が見つかったという声が聞こえました。ご家族が対面できないから、今すぐ来てほしいと言われました。そのとき、陸前高田の町にいましたが、陸前高田の隣町に住田町があります。住田の町のおばあちゃんの家に安置されている、陸前高田の高校生の復元に走りました。ショックでした。津波で亡くなるとこうなるんだよと、その子は私に教えてくれたと思います。

津波で町が壊滅した地域は、岩手県でも幾つかありました。陸前高田と大槌町は町が壊滅していました。山田町と大槌町は隣同士にあり、その町は津波にもまれた後に、火事になっています。亡くなった人は全く面影を残していませんでした。どうしてこんなことが起きたのだろうと、何度もそう思いましたが、そのときは深く考えると自分が動けなくなってしまうので、深く考えないようにしていました。泣くのも後にしようと思いました。　どうして自分の知っている町がこんなふう

になってしまったのだろうと、私たちの会社の納棺エリアでもあるので、知っている人たちを見つけられないもどかしさと、心臓がドキドキするのが止まらないという経験もしました。みんなどうしているのだろうと不安でなりませんでした。

2013年9月11日で、震災から2年半を迎えて、岩手県の新聞でこう発表されていました。岩手県では2年半の段階で1,145名の方がいまだ行方不明である。そして、そのうちの30名弱が子どもたちであるということ。沿岸に行くと、必死で子どもさんを探している親御さんがまだまだたくさんいらっしゃいます。被災地に指定されたのは岩手県、宮城県、福島県、皆さんご存じのとおり、被災地3県と呼ばれています。被災地3県の行方不明者数は今、まだ3,000名近くいます。そして、被災地に指定されなかった被災地の人たちもいます。私たちは今、その皆さんとつながりながら、沿岸のまちづくりをどうしていくかということを考えています。

「復興」ということばはあまり使わないようにしています。「元に戻す」という、みんなの意識がそこへ行ってしまうからです。ストレスが出て怒りに変わりやすい。その状況の中で、どうやって手をつないでいったらいいのか、今は現地にいながら必死で考えます。「町づくり」ということばを使っていますが、私自身は、もう町は元へは戻れないと思います。被災地には、まだがれきが撤去されていない場所もあります。家族を捜している人たちは、一人一人で始めました。「まだ見つからない」との連絡をたくさんもらいます。

被災地から全国に引っ越して行った子どもたちもたくさんいます。中学校の先生がこう言っていました。「先生、転校したくない。先生のところにずっといたい」と、子どもたちはそう言って転校していくそうです。新しい土地でかわいがってもらえるには、どうしたらいいのかなと思っていたときに、彼らにも方言がありますので、言葉の違いがあって、東日本大震災のことをなかなかうまく伝えられないと、子どもたちは子どもたちの世界で悩んでいました。

そのときに絵本の話をいただきました。子どもたちのまわりにいる人たちに震災を知ってもらいたい。家族を亡くした人たちの気持ちをどうか分かってほしい。子どもたちをうまく受け入れてもらえたらいいなと、そういう応援のメッセージも込めました。いいことはいい、悪いことは悪いと、いい大人に出会って、そして成長してほしいなと思います。つらい経験をし、悲しい経験をしたからこそ、深い悲しみの会話ができるはずですから、誰かのそばにいる、その立ち位置を持っています。亡くした家族が自分たちに残してくれたものを、もう一度考えてもらいたいと、子どもたちと触れ合います。

被災地3県では教育委員会が動いていまして、小学校、中学校、高校で、復興教育が行われています。私はその復興教育で、たくさんの子どもたちのところを回らせていただいています。津波で家族がまだ見つからない子どもたち、病気で親御さんや大事なおじいちゃん、おばあちゃんを亡くした子どもたち、自殺で家族を亡くした子どもたち、事故で亡くした人たちがいます。そういう中で、今、目の前にある命を考えてもらうために子どもたちのところに走っていきます。

【子どもたちに語ること】

子どもたちに向けた講演では、こういう話をします。焼き肉好きですか、とまず聞きます。そうすると、子どもたちは大好きと答えます。じゃあ、いただきますってどうやるのと聞くと、大体は、みんなおなかの前で「いただきます」をします。東日本大震災の話をする前に、この話をして、命の価値観をすり合わせておきます。おなかの前で「いただきます」をした子どもたちが言います。カルビが好き、タンが好き、そう答えてくれます。じゃあ、そのみんなが大好きな牛の話をするよと説明をします。

私の祖父は、牛農家でした。小学校１年生のときに、私は牛肉を夕ご飯で残したことがありました。花巻の山奥に遊びに行っていたときの話です。なぜ肉を残すのかと、おじいちゃんに泣かれたことがありました。どうしてお肉を残したぐらいで泣くんだろうと、私は思いました。話を聞くと―岩手では、おじいちゃんのことを「じっちゃん」と呼びますが―そのじっちゃんが言いました。牛は自分が死ぬことを知っているんだ。自分がその死を迎える瞬間、あの牛の黒い目の、かわいい、大きな目から、大きな一粒の涙を流すんだと、そう言われました。その後、牛は専門の人たちに解体されて、それぞれの部位に分けられてスーパーに並ぶ、そう言われました。人は独りで生きているわけじゃないんだ。誰だって、命をいただいて生きているんだよと教えられました。私たちが食べる食べ物は、もともとは命があったものです。だからこそ、命をいただいているという意識を持て。無意識に、目の前にあるものを見過ごしてしまうことほど悲しいものはないんだと言われました。目の前に牛がいるなら、おいしいと言って、残さずに食べてやってくれと頼まれました。

子どもたちへの講演では、その話をします。みんな、誰かの命をいただいて生きているんだよ。目の前の身近な命から気づいてほしいんだよと話します。この話が終わってから、もう一回、子どもたちに声をかけます。じゃあ、「いただきます」をもう一回やってみてくださいと言うと、子どもさんたちは、今度は頭の上に手を持ってきて、両手を合わせて、「いただきます」とやってくれます。本当にうれしくて涙が出てしまう瞬間です。

意識することが何より大切で、私たちは目の前にあることをきちんと意識できているかということが大切になってきます。牛を食べるときは、おいしいと言って食べてあげてね。おうちに帰ったら、きょうのご飯で、家族のみんなに「いただきます」の話、教えてあげてねと言います。そして小学校では特に、トイレの花子さんの話をします。

トイレの奥から２番目にいると言われている、皆さんの小さいときもそうだったと思いますが、奥から２番目にいるトイレの花子さんのことを意識したことがありますか。みんなが怖い、怖いというから、怖いと思っているでしょうと話します。

でも、考えてみて。トイレの花子さんには、きっとお父さんとお母さんがいたはずだよね。お父さんとお母さんがいるということは、おじいちゃんと、おばあちゃんがいるはずだよね。もしかしたら兄弟姉妹もいるかもしれない。どうしてトイレの花子さんは、奥のトイレの２番目にいるんだろう。帰るおうちが分からないのかもしれない。ここにいようとしている意味が何なのかを探ってみたほうがいいかもしれないよと話します。本当に、トイレの花子さんを見たら、おうちに帰りなさいと言ってあげてねと話します。誰かがそう言ったからではなくて、自分で考える力を持ってほしいと思います。

【納棺―その人が生きた背景を考える―】

東日本大震災の中でも、被災者の皆さん同士、意見が合わないこともたくさんあります。自分の生活を考えていったとき、隣のおうちの人たちの生活も考えていかなくてはいけない。物資を全国からいただいたときに、地域の自治会長さんや長老の人たちに全部お渡しして、独り暮らしのお年寄りや独りぼっちになった人たちに配ってもらっ

たことがありました。物資を取りに行く気力もない人たちがたくさんいました。地域の人たちは、その様子をよく知っています。ご飯を作れない人たちには、料理を作って持っていってくれましたし、料理が作れる人には、乾麺などはそのまま渡してくれました。お年寄りは、長い時間をかけてお買い物にも行けません。買って帰ってくるものといえば、カップラーメンばかりです。野菜をいただいたときには自治会の方に相談をして、野菜を食べていないおうちがあれば、そこへ配ってほしいと話しました。

その理由は、納棺の時間も同じですけれども、いつも背景を考えます。その人にお会いしたときに、その背景を考えていきます。その人がどういう環境の中で生活をされているのか。そこを考えながら、普段から仕事に取り組んでいます。背景を考えることとつながるのが安置所の中で、全く形をとどめていない、生後間もない赤ちゃんに出会ったことがありました。お父さんも泣けないでいると聞かされました。安置所の中にはたくさんの人たちが安置されています。門を閉めに行った消防団の人たちも安置されていました。消防団の人たちは、少し高い位置に安置されています。その赤ちゃんは小さな棺に、その隣にはお母さんが安置されていました。伺えば、お母さんが抱っこしていて、お母さんと一緒に見つかったそうです。

赤ちゃんは、少し小さなお肉の塊のように見えました。もう形がなくなってしまっていて、無理かもしれないと思いました。現場で、自分の限界、諦めるかどうかは自分で決めてしまうものですから、だから自分に負けないように、自分の気持ちと向き合っていきます。そのときに大切なのは、その人をしっかり見ることです。まず赤ちゃんに触れてみました。目も鼻も口も分からなくなって、腐敗して色も変わっていました。赤ちゃんに触れて、少しお肉を持ちあげると、新しいよだれかけが出てきました。ああ、誰かがこの子に、このよだれかけをつけてくれたんだなと思いました。お父さんかな、それともおじいちゃんかな、おばあちゃんかなと、そう思いました。この子がどんな形になっても、誰かの大切な家族であることには変わりないんだと、そのときに気づきました。

今までたくさん諦めてきましたが、断ればまた諦めることになってしまう。断れないじゃないかと思いました。背景を知ると、自分の気持ちに気づいていきます。小さなピンセットの片方だけで、１時間半ぐらいかけて戻しました。形を戻して、色も戻しました。よだれかけは、会社の社長室長の菊池が洗剤をつけて洗ってくれていました。血が洗い流されて、きれいになったよだれかけをつけたとき、不思議な気持ちになりました。この子は亡くなっているのに、どうして私はこの子にこんなにいやされるのだろうと思いました。

人生はたった数日だったかもしれない。でも、お孫さんを亡くした多くのおじいさんたちが言います。この子の存在がなければ、僕はおじいちゃんになれなかったんですと、そう話されます。きっと、この子の存在が、また誰かの人生の中に生き続けてくれるのだろうなと思いました。１時間ぐらいでしょうか、ずっとその子を見ていました。気づいたら１時間たっていた、そんな感じだったと思います。その安置所の中では、40 人強の皆さんを順番に戻させてもらいました。夕方から朝までお時間をいただいて、一人ずつ戻しました。津波で亡くなると損傷が激しくなります。専門職ですから、ああ、この人は息を引き取った後に、この傷がついたんだな。一瞬で亡くなられたんだな。いろいろなことが分かります。死は、世間では終わりを示したり、不幸と呼ばれやすいものです。でも、この現場で生かしてもらっていると、私はそうは思いません。死は、その人の人生そのものを価値として持っているし、そして、私たちは、何を残してくれたのかということを確認するために、納棺というお別れの時間を大切に過ごさせてもらっています。どうやって死を迎えたのかということを一緒に考えていく、その時間もとても大

切です。でも、どうやって死を迎えたのかから、どうやってその人が生きてきたのかに、目を向けてもらえる時が必ず来ます。その時を信じて、いろいろなことを一緒に考えていくのが、納棺の時間であると思います。

【納棺師と復元師の仕事】

納棺師は、医療や介護職のプロの皆さんがお看取りした方を引き継がせていただき、死後変化に対応しながら死後処置をし、お棺にご安置するという仕事になります。人には事故や災害、自殺、虐待など、いろいろな死の迎え方がありますが、面影をなくしてしまった方のところへ行って、きちんと元に戻させていただいて、人生の最期にご家族とお別れの時間を持っていただけるように、お手伝いをさせていただくのが復元師の仕事になります。私はどんな状態でも元に戻します。本を出版したことで、被災地の皆さんから、たくさんご連絡をいただくようになりました。どうして緑になったの、どうして黒になったのと、自分の家族が変色したことを気にされます。きっと、亡くなったご本人がご縁をくれたのだと思いますよという話をします。

人は必ず戻るし、腐敗したり、変色したり、変形したりするのは、ご本人のせいでも、誰のせいでもなく、人は亡くなると、土に帰ろうとする自然現象なんですよと話をします。ご本人の立場に立って考えてみましょうねと、気持ちを少しずつ柔らかくしてもらいます。

まず自分の立ち位置から考えていただきますが、その後、ご本人の立場になって考えてもらえる時間が来ます。小さな子どもたちが、「お母さんは、私たちを置いていったの」と聞きます。答えは、質問したご本人の中にあることが多いです。更に言えば、ご本人の中にしかないこともあります。

「どう思う？」と聞いてみると、「お母さんだったらきっと、そんなことあるわけないでしょって言うと思う」と、子どもたちは答えます。それを受け入れるだけです。そうだね。棺を挟んで子どもたちとお話をすることがたくさんあります。死に触れたからこそ悲しみの意味を現実に知っていきます。悲しみという感情の中には大事な思い出があります。その思い出の中には、生きていたからこそ感じる、五感で感じたぬくもりがあります。手をつないで温かかったお父さんやお母さんの手のぬくもりをみんな知っています。悲しみという感情の中には大事な思い出があるから、私は悲しくてもいいと、そう思います。子どもたちは年齢を問わず現場の中でそれをきちんと見つけてくれました。「悲しくてもいいよね」。「そうだよ、いいと思うよ」と話します。

私が納棺師になった理由も、実は子どもを亡くしたことがきっかけでした。ひきこもったし、八つ当たりもしました。それまでの私は、人は独りで生きられると思っていました。大事な子どもを亡くして、後を追おうとしたそのときに、いろいろな人が本気で怒ってくれました。現場で出会った、自殺で子どもさんを亡くした親御さんたちが、私の今の活動を支えてくれています。お空の上に行った子どもたちに、自分たちの寿命が来たら、会える日が来るんだ。そのときに、お母さんが生きてきた背中を見ていたかと。そう言おうと、みんなで話し合うこともよくあります。

東日本大震災の安置所の中でも、たくさんのご遺族に出会いました。全国各地から、また海外から、支援していただいた物資を使って、ボランティアとして活動できたのが本当のところです。１日200箱近く、会社に段ボールが届きました。その一つ一つにお手紙が入っていました。小さな封筒があって１枚の脱脂綿が入っていたことがありました。その中にお手紙が入っていました。「僕は小学校４年生の男の子です。原発の問題があって、関東に引っ越しています。僕のお小遣いで脱脂綿を１枚買いました。亡くなった人に使ってください」と書いてありました。泣きました。自分も大

変なのに、どうしてこんなことができるのだろうと思い、その背景を考えました。この子が私のところへ脱脂綿を送りたいと、そう申し出たとき、あの大変な中で、その子の思いをかなえてくれる大人の人がいたんだなと思いました。親御さんかな、それともまわりの大人の人たちなのかなと思いました。脱脂綿を抱きしめて、安置所まで走りました。

福島に度々行くのは、いつかその子と出会えたらいいなと思うからです。手紙を書こうと思っても、その子は住所を書いていませんでした。今振り返ると、もしかしたら、あの子も大事な家族を亡くしていたのかもしれない。悲しみの中にあって、愛は、お一人お一人との大事な時間になります。皆さんの気持ちをお預かりして、そして安置所に走らせてもらいました。大事な時間だったなと思います。

【ＮＨＫスペシャル「最期の笑顔」】

今皆さんに、１つの映像をご覧いただきたいと思います。「NHK スペシャル」の 49 分間の番組から東日本大震災の映像で 10 分少々になりますが、どんな気持ちで家族を捜していたか、どんなふうに死と向き合われたのか、そのあと、１年後のコメントが出てきます。どんなふうに亡くした家族を思って生きていらっしゃったのか、しっかり映像になっていましたので、皆さんにご覧いただきたいと思います。題名は「最期の笑顔」といいます。NHK さんから、題名をどうしますかと聞かれたとき、すぐに答えたのが「最期の笑顔」でした。

４人の子どもさんを残してお母さんが津波で亡くなりました。お父さんから、「僕に気を遣っているのか分からないけど、子どもたちがお母さんの話をしないんです」とご連絡をいただきました。すぐに走っていきました。子どもたちとの遊びの中で、悲しみや負担になっている部分を体の外に出すという作業を行うことがあります。子どもたちは遊びを通して行っていきますが、そのときに絵を描きたいと言いました。じゃあ絵を描こうと話しました。子どもたちは一番最初にアンパンマンを描きました。２番目のお姉ちゃんがその後、女の人の顔を描きました。私は、ああ、お母さんだなと、すぐに思いました。皆さんにご覧いただく映像の中で、私がお母さんの遺影を何度も何度も確認させていただく場面が出てきます。納棺の時間には、ほとんどのご家族が、唇をしっかり閉じてほしいと希望されることが多くあります。そのときに考えていたことがありました。子どもたちはきっと、棺という存在を初めて見るだろうと思いました。そこにお母さんがいると言われたときに、どのぐらいの勇気を持ってのぞき込むだろうと考えていました。子どもたちにとってのお母さんは、どういう表情なんだろうと悩んでいました。お母さんの歯には特徴がありましたので、唇を閉じるよりも、遺影の写真のように歯を出して笑っていただいたほうがいいと、最後はそう決めました。笑いじわをたどって、ニッコリと笑ってもらいました。

２番目のお姉ちゃんが描いた絵は、歯を出して笑っている女の人の絵でした。上手だねって声をかけると、「お母さんの最期の笑顔だよ」と、彼女はそう言いました。私たちは絶対に聞き逃してはいけないことがあります。現場の中で、多くのご遺族が「最期」という言葉を使います。一人一人それぞれ「最期」の意味は違います。目の前のこの子は、「最期」という言葉を使いました。この子にとって「最期」とは、どういう意味を持つのか。お絵描きを通して深めていきました。

その子の言葉を自分のお守りに代えて、いろいろな現場で、大変なときに思い出すことも多くあります。「NHK スペシャル」の題名は「最期の笑顔」としてもらいました。「最期の笑顔」という言葉には、彼女のお母さんに対する思いが込められています。10 分少々の映像になります。どうぞご覧ください。

【映像上映】

飛田さんのおうちの子どもたちが、その後どのような生活をしているのか、その生活ぶりをNHKさんが密着していて、この番組の中ではその部分も放送されていました。一番下の子は今３歳です。お母さんの遺影に何でも持っていきます。折り紙を折ったり、お絵描きをしたり。亡くなった人の写真は大抵高い位置に掲げられますが、飛田さんのおうちは仏壇の下に立てかけています。お母さんがいつもそばにいられるように、子どもたちの視線の高さで向き合えるように、子どもたちが話しかけたいときにいつでも話しかけられるようにと下に置いています。お母さんの遺影の前にはいつもいろいろなものが置いてあって、一番下の子は、お母さんの遺影に向かってお歌を歌ったりして過ごしています。

それぞれのおうちにはそれぞれの生活があって、何を大切にしているのかを、その後の遺族訪問で教えてもらいます。飛田さんのおうちの子どもさんたちが、お母さんの話をしなかった理由がありました。お絵描きの最中に子どもたちが教えてくれました。「お母さんね、実は寂しくなったら夢に出てきてくれるんだよ」と、そう話していました。東日本大震災でもそうでしたが、通常の納棺、復元の現場でも、遺族訪問に伺うと、多くのご遺族が「夢に出てきてくれるんだ」と、話をしてくれます。そんなふうに思い続けている気持ちが夢を見させてくれるのかもしれないし、もしかしたら本当に来てくれているのかもしれないし、それはお一人お一人の気持ちの中でしっかり考えてもらえればいいなと思っています。

子どもたちが、お母さんが夢に出てきてくれたときの話をしてくれました。学校で友達とケンカして帰ってきた日の夜に、お母さんが夢に出てきて言った。「どう考えてもあんたが悪いでしょう」と。夢の中でそう言われたんだと教えてくれました。お母さんが夢の中で、「あした学校に行ったら謝りなさい。きっとまた仲良くなれるよ」と言ってくれたそうです。その夢を見た翌日に、彼女は友達の前に立って、夢を思い出したそうです。夢の中で、早いほうがいいよってお母さんに言われた。勇気を出して謝ってみたら、お母さんが言っていたとおり、また仲直りできたんだって言っていました。お父さんがそれを聞いて、「なぜだ、おかしいな。俺の夢には出てきてくれないのに」と言っていました。そうしたら、子どもたちが、「お父さんね、いつもビールいっぱい飲んで寝るから、せっかくお母さんが来ても気づかないんじゃないの」とお父さんに言っていました。そうしたら、お父さんが、「そうか、ビールを飲みすぎているから悪いんだ。きょうはビール、１本だけにしておこう」と言っていました。そして、子どもたちが、「お父さん、それでも飲むんだね」と。思わず私もその場にいながらくすっと笑ってしまいました。でも、よく見ると、亡くなったはずのお母さんの存在で、また親子の絆が戻っています。亡くなったはずなのに、どうしてこうやってまた繋がれたのだろう。それはきっと、残された家族の一人一人の心の中で、忘れないでいることでずっと生き続けてくれる、ともに人生を歩んでくれているんだなと、そう思いました。死は終わりではなく、その思い出の記憶と一緒にずっと生き続けることができる。そういうことを教えてもらった時間だと思います。亡くなったはずのお母さんが、また親子の絆を取り戻すのに大活躍でした。

お父さんは車の営業をしています。一番下の子が男の子で、よく熱を出します。熱を出すと、大槌町には預ける場所がありません。でも、仕事を休むと給料が減ってしまいます。お父さんは、車の中で看病しながら営業に回っている。そういう現状でした。被災地では、子どもたちの後追いが後を絶ちませんでした。自殺未遂をした子に話を聞いてみると、お母さんのところに行きたかったと言います。自分が子どものところに行きたいと思ったときと同じ思いだと感じました。その会い

たいという気持ちは間違っていないよと話しました。でも、お母さんだったら、あなたに何て言うだろうねと話しかけました。「しっかりやれよって、そう言うと思う」、子どもたちは思い出の中からちゃんと答えを見つけます。

【子ども夢ハウスおおつち】

子どもたちの活動をしています。集まる子どもたちは、おじいちゃん、おばあちゃんがまだ見つからない、あるいは、お父さんやお母さんを亡くしていて、それぞれの世界の中で一生懸命考えています。亡くした家族の話がしたいと、そう言われました。「子ども夢ハウスおおつち」という活動をさせていただいています。半年ぐらい準備をして、今年の4月11日に立ち上げました。子どもたちが口コミで広げてくれるので、たくさんの子どもたちがあちこちから遊びに来てくれます。誰でも来ていいことになっていますから、岩手県だけではなく、宮城や福島の人たちも来ます。そこまで集まると予想もしていませんでしたので、子どもたちを見るほうの手が足りなくなってしまいました。学生の皆さん、どうぞ手伝いに来てください。お待ちしています。「子ども夢ハウスおおつち」には、作業療法士で自立支援の専門家の28歳のお兄ちゃんがいます。吉山くんといいます。吉山くんは、地域の皆さんの手を借りながらがんばっています。認知症の方も子どもたちの声がする、笑い声がすると言ってお手伝いに来てくださったり、漁師をやめたお父さんたちが手伝いに来てくれたり、そして大槌町の役場の皆さんも支援してくださいます。このように地域の皆さんと一体となって、子ども夢ハウスの活動を続けています。

子どもたちのほとんどが東日本大震災で家族を亡くしていますので、突然、悲しみの話が出てくることがあります。そういうときは、現地のスタッフが子どもたちの悲しみと向き合っていきます。そんなふうにして、今うまく連携ができているなと思います。「子ども夢ハウスおおつち」は、全国の皆さんの寄付金で運営させていただいています。どうかお金持ちの方を見つけたら、少し耳に囁いてみてください。「夢ハウスおおつちにお願いします」と。子どもたちは、たくさんの人たちの力を借りて自分たちがここにいるんだということを知っています。寄付をいただいた方のお名前は、子どもたちが自分で書きたいというので、小さな板に子どもたちがヤスリをかけます。そこに寄付をいただいた方のお名前を書きます。そして、自分たちが普段過ごす大きな居間の壁に貼りつけています。寂しくなったり、悲しくなったりすると、子どもたちは見上げて、これだけの方たちが自分たちを思ってくれているんだという勇気に変えています。

【被災者の方々から提供された資料でできた映像】

もう1つ皆さんにご覧いただきたい6分ぐらいの映像があります。この映像は被災者の皆さんから講演で使ってほしいと提供してもらった写真を取り込みながら作りました。東日本大震災の初期の段階から、復元ボランティア、そして安置所の中のお別れ、現在の活動、子どもたちの死生観まで、どんなふうに過ごしているのかというところをご覧いただきたいと思います。では、どうぞ。

【映像上映】

少し説明します。みんな必死で家族を探したというパワーポイントです。捜索現場では、発見されるたびに弔いの歌が上げられました。捜索活動の第4回目、町にたくさんの旗が揚がっています。この子は大事な人を探しています。探しても、探しても見つからない。そういうときの写真を提供してくれました。そういう状況の中で、復元ボランティアを続けさせていただいていました。

現在でも、沖に向かって手を合わせる人たちは

たくさんいます。子どもたちの集まれる場所をつくろうと、社会福祉法人「夢のみずうみ村」という名前をつけてありますけれども、そこの理事長さんが立ち上がってくれました。オープン当日から子どもたちが大勢集まってきます。ケンカをすると、力比べという方法になります。「遊ぶ場所が欲しかったんだ」って子どもたちが言います。学校のグラウンドには仮設住宅が建っていますから、遊ぶ場所がありません。家族を亡くしたのは、大人も子どもも一緒と言われております。

これが現在の状況です。まだまだこういう場所があります。まだみんなで捜索をしようと思っています。「いっぱい笑いたい」と子どもたちはいいます。時々ケンカもします。虫取りもいっぱいしたいと言って、ダンゴムシをとっています。ダンゴムシぐらいしか虫がいないんです。初めて一人でウンチできました。小学校１年生の子です。「ウンチさんバイバイ」とやりました。「いろいろなことができるようになりたい」と、子どもたちが言います。

「僕たちの地域に神様が来てくれたよ」って、子どもたちが喜んでいました。民俗芸能ですね。見つからない家族のために拝んでもらいました。「ねえねえ、神様って」、その子が、権現様に向かってそう言っていました。「僕は全然、神様のことが怖くないよ。だって神様はお父さんのお友達なんでしょ」と、彼が獅子頭の隣でこそこそ話でそう言っていました。「お父さんは空の上に行ったんだ」とこの子は思っています。「虹が出たらお父さんに会えるかもしれないって、僕はいつもそう思っているんだ」と、今の子は普段からそういう話をしています。「僕たちのことを時々思い出してね」って、お空に向かってよく言います。その子はお父さんを亡くしています。夢ハウスの中でたくさんいろいろな遊びをしながら、お父さんにやってもらった遊びを思い出しています。彼は女の人には全く興味がありません。男の人を見つけると飛んでついて歩く。そういう特徴的な子です。男の人が大好きで男の人にまとわりついて離れない。ただあぐらをかいて座っている男の人の体をよじ登ってジャングルジムみたいにします。そんなふうに、子どもたちが少しずつその思い出の中から亡くしたご家族と一緒に遊んだことなどを思い出して、みんなで遊びの中に取り入れています。

初めてウンチできたよという子は、おじいちゃんを亡くしています。お母さんが、変わってしまったおじいちゃんに会わせるわけにはいかないと悩んでいたことを、涙を流して子ども夢ハウスの中で話してくれました。おじいちゃんが変わってしまったこと、おじいちゃんが帰ってこないこと、いろいろなことをこの子は彼なりに考えていたんだと思います。でも、おねだりはしなかったといいます。火葬されてお骨になったおじいちゃんをお母さんが対面させたそうです。両親は共働きでしたから、育ての親がおじいちゃんになるそうです。骨箱を見せて、「おじいちゃんだよ」ってお母さんがおじいちゃんと会わせたとき、彼はその骨箱に向かって「おじいちゃんのばか」と言って、なぐりかかったそうです。彼が夢ハウスの中で教えてくれました。津波の前の日まで僕はおじいちゃんとお風呂に入っていたんだ、毎日入っていたんだよと教えてくれました。そうだったんだね。お風呂に入るとおじいちゃんをいつも思い出す。おじいちゃんのこと忘れてないよって、彼もまたお空に向かってお話をします。

人それぞれの死生観がある中で、子どもたちが亡くした家族のことを思い続けられるように、私はそばでお手伝いをさせてもらっているという状況になるんでしょうか。どうぞ皆さん、時間があったら遊びに来てください。

【ヴァイオリニスト　穴澤雄介さん】

皆さんに聞いていただいたヴァイオリンの曲ですけれども、演奏は、目の不自由な方でヴァイオリニストの38歳男性、穴澤雄介君です。最近、

彼とセミナーでコラボレーションすることが多くなりました。東京に住んでいます。彼が控え室の中で教えてくれたことがありました。僕は最初から目が全く見えなかったわけではないです。僕がお母さんのお腹の中にいたとき、お母さんがはしかにかかっちゃったそうです。そのとき、お医者さんの診断で、「しょうがいを持って生まれるでしょう」と言われた。彼が生まれたときの診断では、「心臓の疾患を持っています。どのぐらいまで生きられるか分からないです」と言われたそうです。事実、彼は今度３回目の手術があります。そして、最初は目が見えていた。そのときの診断では、「いずれこの子は目が見えなくなるでしょう」と言われたのですが、小学校４、５年生のときにどんどん目が見えなくなって、すごく不安になり、お父さんにそれを打ち明けると、お父さんは彼にヴァイオリンをくれたそうです。「どんどん目が見えなくなって、どんどん不安になる気持ちと、ヴァイオリンをもらって、練習すればどんどん上手になる嬉しさと、不思議な感情でした」とお話ししてくれました。高校１年生になったとき、光を全く感じなくなったそうです。大変な生活の始まりでした。全部真っ暗になってしまった。

彼が27、28歳のとき、お父さんが突然いなくなり、まわりの人たちは、お父さんを許すなと彼に言いました。話を聞けば、お父さんが経営していた会社が倒産したそうです。お父さんはいなくなってしまった。彼はどうしてもお父さんに伝えたいことがあって、何年もかけて探したそうです。そして、やっと見つけて、「お父さん、今まで僕が切ないときにいつもそばで支えてくれたのに、お父さんが一番切ないときに僕が頼りなくて支えてあげられなくてごめんね」と伝えたそうです。彼はそれだけを伝えたかったと言っていました。お父さんは泣き崩れてしまったそうです。

彼が３回目の手術を受ける前、どうしてもお父さんに残しておきたい曲をつくりました。それが、皆さんに今聴いていただいた「共助」という曲です。私は彼の話が大好きで、いつも勇気をもらいます。被災地のことにも相談に乗ってもらいます。頼もしいお兄さんですね。

【納棺の時間―三途の川と奪衣婆・懸衣翁―】

納棺の時間にはいろいろな話をします。おうちの人たちに今と向き合ってもらって、ご本人の気持ちになって考えてもらう時間のことです。ほとんどのことをやり尽くしてもらって、もうやることはやったと思ってもらったとき、死の意味をきちんと自分自身の中で理解するときが来ます。死は終わりではなく、生きているからこそあるもの。でも、それを知っていても悲しいのはなぜなのか。それは思い出があるからです。死は、その人の人生そのものを表しています。死は終わりではなく、忘れないで思い続けてもらうことさえできれば、ずっと生き続けていてくれる。そのようなことをご家族は納棺の時間の中でやっていきます。それが、大切な人が家族に残してくれたものなのではないかなと私は思います。

共に信じ合って、一緒にできること。家族は、火葬までの限られた最後の時間まで力を振り絞って尽くされます。しっかり尽くしたと思っていただいたときに、必ず出る言葉があります。この言葉が出れば、一歩前に進んでもらったという目印になります。ご遺族はこう言います。「死んだらどこへ行くんだろう」。それはきっちり未来を見てくださっているという証拠になります。心配し始めている。とてもすばらしい感情だなと思います。

そういうお話になったときには、宗教者の方にバトンタッチする。納棺の現場で、今度はお年寄りが力をふるいます。お年寄りの知っている昔話から、様々な死生観、地域に残る死生観、日本に伝わる昔話が家族の皆さんに伝えられる時間になってきます。「死んだらどこに行くのかな」、そう家族が言ったとき、お年寄りはこう言います。「三途の川だべ。だから、家族はまだまだやるこ

とがあるんだ。手を合わせて、ちゃんと向こうに行けるように、まだまだやらなくちゃいけない。死んだら終わりじゃないんだよ」、そう言います。私は、命がけの手術をしたことが１回ありまして、手術中にこの三途の川の前に立っていました。前に立つと、向かって右側に祖母がいました。そのおばあちゃんが、「来るな！」、そう言いました。でも、私は手術の前に食禁といって、ご飯を食べてはいけませんと言われていました。胃の中を空っぽにするためです。だから、三途の川の前ですごくおなかがすいていました。私が見た三途の川はものすごく細くて、一歩で渡れるぐらいの川でした。向かって右側ではおばあちゃんが怒っています。でも、向かって左側の奥のほうからは、豚肉の炭火焼きのようなにおいがしました。そこに行きたい、私はそう思いました。そして、その川を、おばあちゃんは怒っていますが、肉を食べたいばかりに川を渡ろうと思いました。川を渡ろうと思って右足を上げたとき、後ろのほうから、私の名前を呼ぶ姉の声が聞こえました。ちょっとだけ振り向いた瞬間、麻酔から覚醒しました。見ると、姉が立っていて、「なぜ呼んだのか。私は豚肉を食べたかったんだ」と姉に言っていました。姉は、麻酔でちょっとおかしくなったのかなと思っていたようですが、私は本気でした。

この前、海外の皆さんに講演をしましたら、海外でも三途の川を見たことがある人がいるといいます。そして、がん患者の方が入院されている病院などに講演に行かせていただくことが多くなりました。死を間近に控えている皆さんに教えてもらうことがあります。「三途の川を見たことがある人？」と尋ねると、がん患者さんの会の場合は、半分以上の方が手を挙げます。そして、２回行った、３回行ったと教えてくれます。三途の川は、私も見ましたから、本当にあると思います。いろいろな方からお話をうかがえるので、せっかくだからまとめてみました。三途の川はどんなところ？　はい、川の向こう側にはお花畑が広がっていて、光があふれ、よい香りがしていると言われています。私の場合はお肉のにおいですね。川の向こうに身内が立っていることもあるらしい。がん患者の皆さんは、三途の川の向こうで知っている人が立っている。あ、立っていると思ったら、「おいで、おいで」と呼ばれるのだそうです。「いやいや、まだ行けない」と言って断って目が覚める。あと、赤い橋がかかっていることもあります。納棺に立ち会わせていただいていると、仏教、神道、牧師さん、神父さん、いろいろな宗教者の方に出会いますが、その宗教者の皆さんがおっしゃいます。確かに、三途の川に行ってきたという人はいるけれども、三途の川を渡って戻ってきた人はいない。なぜだろうか。きっといいところに違いないと宗教者の人が言ってくれると、おうちの人たちもとても安心します。

この三途の川、そう簡単に渡れないということを皆さんはご存じでしょうか。日本の昔話、民俗信仰の中で語り継がれている納棺の時間にも、後半でこの話が中心になってきます。三途の川はそう簡単には渡れない。なぜでしょう。三途の川にはこういう人たちがいるんです。奪衣婆（だつえばあ）と懸衣翁（けんえおう）といいます。私たちの東北では、亡くなった家族に会いたいと思ったら、あそこに行けと昔の人たちが残してくれたお山があります。山形県でしたら山寺。青森県だと恐山になりますが、あの世と呼ばれているところの入り口に、この奪衣婆と懸衣翁の像があります。この２人の前を通過すると、私たちはあの世に行っていることになるわけです。これは、日本の民俗信仰と呼ばれるもので、家族を亡くして悲しいと思う気持ちは、古くはネアンデルタール人も持っていたと言われています。ネアンデルタール人の時代には、亡くした家族のお墓に花を手向けたというものが残っています。奪衣婆さん、このおばあさんが後半の話の中心になっていきます。納棺の時間には、このおばあさんを意識して行う日本の伝統行事があります。宗教を問わず、

宗教者の方も見守ってくれます。奪衣婆さん、せっかくみんなで一緒に着せた亡くなった人の着物を奪う、脱がすのが仕事です。このおばあさん、亡くなった人の着物をはいで、木の枝の上に立っている、旦那さんですね、ご主人に渡します。この旦那さん、懸衣翁は、おばあさんから亡くなった人の着物を預かって、目の前の木の枝にかけます。目の前の木の枝にかけて、その木の枝は布の重さでぐーっとしなだれていきます。そのしなだれた分が、その人の罪の重さだと言われています。皆さん、大丈夫ですか。今からでも大丈夫ですよ。それぞれの、今度は宗教になりますけれども、そのぐーっとしなだれた枝の罪の重さを閻魔大王に知らせる係がいる宗教もあります。このお話は民俗信仰として全国各地でとても大切にされて残っています。

【日本の伝統「隠し銭」】

私たちの納棺の時間では、この奪衣婆さんに見つからないところに、隠して持たせてあげるものがあります。胸元には、六文銭というお金を持たせてあげるのですが、ご本人のために持たせてあげるお金が、全国各地で「隠し銭」と呼ばれています。全国各地の火葬場が行政の管轄になってきましたので、黒い煙の出るものは入れてあげられなくなってきました。様々な宗派の宗教者の方に伺いましたところ、紙に書いてもいいと言われます。ですから、ご家族が持たせてあげたい分の金額を紙に書いて、隠し銭として、このおばあさんに見つからない場所に隠して持たせてもらいます。だいたい金額は、１億円ぐらいが平均と言われます。仲の悪かったご夫婦は、奥さんがご主人に持たせてあげるお金を、１回浮気したから許さないといって、100円という方もいらっしゃいました。ただ、それはご夫婦の問題ですから、こちらが口を出せるものではございません。きっと何倍にもなるでしょうと、娘さんたちにお話をして、何も持たせないというのも問題だから、100円は持たせてあげようと言っていました。

このようにお金を持たせてあげようという伝統が、日本全国各地でまだまだ残っています。こういうおうちがありました。おじいちゃんを亡くしたお孫さん、この隠し銭の時間になったときに、「うちのおじいちゃん、いつも宝くじを買っていたんです。でも、一度も当たったことがない。だから、最後ぐらいは当ててあげたいんです。しかも前後賞で」と言っていました。小学生のお孫さんです。「そうね、じゃあ折り紙に書いて」とお願いしました。折り紙の一番上から、「おじいちゃん、当選おめでとう。前後賞合わせて３億円」と書いてあるわけです。でも、その下に何か小さく書いてありました。読んでもいいよと言われたので、読みました。上から読むと、「おじいちゃん、当選おめでとう。前後賞あわせて３億円」、小さい字になります、「そのうち半分は僕たちにバックしてください」と書いてありました。そこに集まられた皆さんが言っていました。じいさんは、生きているうちも孫に小遣いをせびられて、亡くなってもなお、小遣いをやらんといかんのかと。みんなで大笑いの時間になります。そのお金をしっかり隠して持たせてあげないと、このおばあさんに取られてしまうと言われていますから、ご家族の皆さんでしっかり隠してもらいます。この前の「いのちの授業」で校長先生が言いました。どこに隠すと思いますかと。お尻の中や体の中にみんな隠したいのですが、実は足元です。私服を着せて差し上げたときには、靴下の中。それから、旅支度といって、旅の格好をしていただきますが、そのときは足元、足袋の中にはかせて隠して持っていただきます。わらじや草履を履かせてあげる地域もありますので、そういうときは親指のところの裏側にひもで結びつけてもらいます。これが日本全国各地、まだまだ家族がやらなくてはいけない、日本の伝統で残っている「隠し銭」という風習になります。

その足元は、奪衣婆さんには見つからないと言

われていますから、もしこの会場の皆さんの中で、大切なご家族を亡くされた経験をお持ちの方は、これをやり忘れていたという場合、半紙に金額を書いて、海や川に流していただくと、届くと言われています。どうぞ円マークを忘れないようにしてください。例えば、ただ「１億」と書くと、おまんじゅうで届くことがあるそうですから。１億個のおまんじゅうをもらっても向こうでは大変でしょう。配っていただいてもいいとは思いますが。奪衣婆さんと懸衣翁、納棺の時間は悲しい時間ですが、私たちに血のつながりがなくても、昔の人たちがその後の世代のために残しておいてくれた昔話によって、私たちはこの時間を支えてもらっています。

今を生きる私たちが、次の世代に何ができるかを今のうちに考えておかなければいけないと思います。大人の背中を見て育って、格好悪いところもちゃんと見てよと言っています。泣いたり、悔しかったり、そういう姿もちゃんと見なさいと子どもたちには伝えています。それが勇気になり、前に進むパワーになっていくんだと話します。悲しいときは悲しいと、小さい子どもたちにも伝えていく。今の被災地はそういう感じです。お時間がありましたら、岩手、宮城、福島各県で、被災地に指定されなかった被災地に足を運んでいただければと思います。そして、長期的にご支援をいただいている皆さんには、深く心から感謝を申し上げます。

【奪衣婆と懸衣翁の姿】

長い時間お付き合いいただきまして、そして皆様のますますのご活躍を心から祈念いたしまして、最後に、奪衣婆さんの生写真を皆さんにご覧いただいて、お別れをしたいと思います。心臓の弱い方は目をつぶってください。心臓の弱い方は目をつぶってくださいと言ったら、この前の高齢者会合で全員が目をつぶってしまいました。そういう事態もありました。この奪衣婆さんは、妖怪でも何でもありません。昔からお天道様と呼ばれ、お空の上から私たちをしっかり見てくれている、そういうおばあさんです。仏様であって、妖怪でありませんから、気をつけてくださいね。もし皆さんがお守りにしたいというのであれば、このおばあさんの写真を撮っていただいても構いません。どうぞ、携帯をご準備ください。１つ言い忘れていました。いい行いをしている方には笑顔で見える、そうではない人には、そのまま見えます。宜しいですか。それでは、心の準備が皆さんできたところで、奪衣婆さんの生写真をご覧いただきたいと思います。どうぞ。

【映像提示】

この前の講演で、一番前の方が何かおっしゃったんですね。それで、マイクを向けてみましたら、その方は、「うちのお姑さんに似ている」、そう言っていました。私も何て言っていいか分からなかったので、ぜひ今度紹介してくださいと言いました。私たちは日本の伝統の中で守られている、寄り添ってもらっていることになります。人は一人では生きられない。誰かに気づいてもらえることが何より元気のパワーになる。そして、しっかり強く生きていく。一歩ずつ踏み込んで歩いていくということになっていくと思います。

【質疑応答】

○質問１　感動するお話を本当にありがとうございました。私もNHKを見た一人ですが、３点、質問をしたいと思います。１つは、東日本大震災発生時から今日まで何人ぐらいのご遺体に関連されたのでしょうか。２つ目は、先生を受け入れられたお宅ばかりではないと思いますが、断られたときのお気持ちはいかがでしたでしょうか。３つ目は、「復元師」という言葉でも分かりますが、あえて「おもかげ」という言葉を前に付けた意味を教えていただけますでしょうか。

○笹原氏　震災関連ということですね。実は、ボランティアで行わせていただいたので、会社でやっていればカルテが残っていますが、記録をきちんと残していませんでした。間違いのない数として300体以上ということでお話をさせていただいています。自衛隊や警察の皆さんは倍以上いっているのではないかというお話をしています。ただ、口コミで広がったり、現地の人たちからの紹介だったりで、安置所に行って復元をさせていただいているときに、飛田さんのおうちもそうですが、「僕の奥さんにも口紅を塗ってもらえませんか」といって依頼があり、それで最後まで復元を行わせていただいた方。あとはどうしても亡くなると横を向きますが、お顔だけ正面に戻したという方もたくさんいらっしゃいます。それを全部合わせるとなると、本当に数えていません。私の場合は復元ボランティアなので、安置されて、身元確認された方ということになりますから、そこが条件になってくると思います。

流れとしては、見つけてくれた人がいる、そこから出してくれる人がいる、警察管轄の安置所まで運んでくれる人たちがいる。自衛隊、警察、消防署・消防団、海外の支援の皆さん、それから、大学生のボランティアが捜索をしてくれたということを先日伺いました。そういう方たちによって安置所まで運んでもらった。そして、安置所では検視するお医者さんたちがいて、死亡診断書を書いてくれます。その後、警察と消防の皆さんによる砂を洗い流す作業があって、安置される。一つ一つの安置所、警察管轄の安置所の中ではそういう流れになっていました。

初期の段階では、状態はそんなに悪くないので、お一人15分、かかっても30分ぐらいがご遺体の復元時間です。ただ、NHKスペシャルの中にもありました飛田さんのおうちは、50日近くたっている。冷却されていないで外にいるということで、この時期の人たちは腐敗が進行していました。色も人の色ではないです。時間がたつ度に、お一人あたりの復元時間が長くなってくるという時期に入ってきます。お一人につき1時間かかり、その後はお一人につき2時間、3時間というふうになってくる。7月ぐらいが復元ボランティア自体は最後だったと思いますが、最後の方は白骨化していました。そうしますと4時間半かかることになります。その方はお母さんで、8歳の子どもさんを残して旅立たれた方でした。子どもさんが、絶対にお母さんは帰ってくると言い張っている、まわりの大人たちが困っている。ちゃんと対面させたいということで、DNA鑑定ですね。1カ月以上経つと状態が悪いですから、DNA鑑定に回っていきます。結果が出るまでに1カ月以上かかる中で、誰かが関わる必要がある時期に入ってきた。そういうことにも関わらせていただきました。

○質問1　断られたことはないでしょうか。

○笹原氏　震災でですね。お断りはないです。お一人もいないですね。あとは、震災の直後から、見つかったら復元してほしいという人がいて、まだ見つかっていませんが、そういう方との関わりはありますね。今は、骨が1本見つかっても、指だけでも戻してほしいと。でも、一緒に戻したいと言います。そのようにご遺族の心理も今は少しずつ変わっているのかなと感じます。

断られなかったのは、紹介のほうが多かったからです。東北は、口コミで広がります。警察の方が間に入ってくださったり、ご遺族同士がつながっていて、あっちもお願いします、こっちもお願いしますと、きょうは時間がなくて、安置所が閉まってできないから、明日や明後日でも大丈夫ですかという交渉のほうが多かったと思います。

○質問1　「おもかげ」をつけている理由はいかがですか。

○笹原氏　「おもかげ復元師」は、安置所の中で、おもかげを戻してもらったという言葉が非常に多かったんです。復元の難しさは、状態が全く分からないことで、特に震災の初期の頃は写真がないんです。復元師は、実はご遺族がつけてくれた名

前で、このような職種がなかったので、私が勝手に始めたことです。「お父さんに会いたい」といって泣かれるので、「やるだけやってみます」といって始めました。私に教えてくれる先生もいないので、とにかく現場で積み重ねてきた、震災前はそういう感じだったと思います。その中で、特に安置所の中で、「おもかげが戻っているよ、おいでー」と、まだ対面していないご家族に声をかけるご家族がすごく多かったというのを、本の題名を考えるときに、話したような気がします。

「違う人になった」と言われたら、やめようと思っていました。納棺の現場、復元の現場で、違う人になったと思われたときにご遺族は、「あ、見られるようになった」、「何となくいいんじゃない」、「どうもありがとうございました」と反応しますが、それはあまりよくない評価です。実際に、元に戻ったと家族が思ってくれるためにはどうしたらいいかというと、普段から目の中に指を入れて、目の高さを知ったり、口の中に指を入れて、このしわを探します、笑ったらどこに来るか。位置がきちんと決まれば、しわの出方が変わりますので戻せます。そのようにして一人一人をお戻ししたのが、震災のときに写真がなくても復元ができたところだと思います。

本当に戻ったと思われたときは、先程の「NHKスペシャル」の中にもありましたが、「佳子だ、佳子だ」、とそのようなおっしゃり方になります。「父ちゃーん」とか。特に子どもはストレートですから、違ったら違うって言いますし、そうであれば本当に名前を呼んでくれる。一緒に過ごしていたときの呼び方で呼んでくださると、ああ、よかった、戻ったんだなと思って、私の肩の力が抜け、初めて深呼吸をする時間になると思います。それまでは気を張っていて、違うと言われたところを戻していこうと思っている。現場の中でそういう心理があるので、「どうぞ会ってください」という声かけもしないですね。「直してあげたいところがあったら教えてもらえませんか」、「お待たせしました」というふうに声をかけて対面していただくのが通常だと思います。

因みに、泣きますよ。すごく悲しい現場もたくさんあるので、いっぱい泣きます。でも、泣く場所、泣く相手は、自分で決めておきますから、現場では泣きません。例えば、車です。安置所の中では泣かなくても、車に戻ったらもう号泣です。それからずっと寄り添ってくれたお寺さんですね。悲しみをいっぱい背負って動けなくなったときには、お寺に行って、御本尊さんの前でワーッと泣いて帰ってくる。悲しみを受け入れてくれる人たち、場所、そういうのを普段きちんとつくっておくことが重要かと思います。

○質問２　私は今、卒論で、東日本大震災の震災児のことを書いていますが、重なる部分があって、何か心を揺さぶられるというか、素敵なお話をうかがったなと感じました。うかがっている中で、死についてですが、私の中ではまだ、死は怖いもの、不安、何かマイナスのイメージがありますが、笹原さんのお話をうかがっていると、死に対する考え方がポジティブで、そこから始まっていくんだという考え方をされていると感じました。そういう考え方に至ったきっかけがあるようでしたら教えていただけますか。

○笹原氏　この仕事を始めたときは、悲しみの中にいる。自分はなぜここにいるのだろう、自分は何がやりたいのだろうと考えることが多かったのです。今でも、客観的に自分を見るということでは、立ち位置を間違わない、つなげることをメインに考えていて、自分にできることとできないことを知ったら、今度はできる人につなげていきます。「できません」で終わるのではなくて、できる人がいるからご紹介しますね、と地域に帰っていただくことが最終到達地点です。

私も死が怖かった時期がありました。子どもを亡くして、何で人は死ぬんだろうと。小さい頃から考えてきたはずなのに、そう思ったことがあり

ました。でも、現場には、知恵を持っているお年寄りがたくさんいます。超高齢化社会と言われますが、私は、もっともっとお年寄りに会って、いろいろな知恵をいただきたいと思っています。現場の中にはお年寄りがいて、例えば子どもを亡くしたお母さんが、「もう誰も来るなー、部屋に入るなー」といって叫んでいるとき、90歳ぐらいのお年寄りが、「自分もね、60年前に子どもを亡くしたんだよ。何年たっても悲しみはゼロにならないよ」と言って部屋に入ってきてくれます。そういう現場では、そのお母さんがワーッと、おばあちゃんに抱きついて泣く。その２人は、血はつながっていないんです。私たちが知らないことを、年配の人たちはたくさん知っている。そういうお年寄りに支えられている納棺の時間なんだなと思います。ですから私自身も、１件１件の現場の中で育ててもらっている。お年寄りには、言葉の使い方や細かいところまで教えてくれる方が非常に多いので、何でみんなに好かれているんだろう、この好かれている人の言葉をちょっとだけいただいちゃおう、その知恵をちょっと教えてもらえませんか、と後からうかがったりすることも多いです。だからいっぱい知っている人に、いっぱい知恵をもらっておく。そのかわり、年配の方は体がなかなか動かないです。一方、こちらには体力はあります。これも「共助」といいます。共に助ける。そういう意味で、社会、地域は大事で、できるだけたくさんの年配の人に会って、いっぱい教えてもらうといいと思います。私も納棺の現場にいるお年寄りのような80歳、90歳になりたいと思っています。東日本大震災を語り継ぐ語り部になりたいと思っています。だから、一緒に語り部になりましょうね。

○質問３　私も今、陸前高田市で、大切な人を亡くした子どもたちのサポートをさせてもらっているのですが、学生たちが、そういった子どもたちのために何ができるのかをお聞きしたいと思います。

○笹原氏　そうですか。実は高田の被災者の方も非常に多くて、おじいちゃんを捜すという子どもたちもいれば、捜索活動をしたい子どもたちもいます。大槌から高田まで１時間半ぐらいですね。後で連絡ください。詳しくお伝えします。つながりましょう。

○質問４　僕はまだ、死体や遺体を見たことがありません。おそらく見たら、直視できないと思います。笹原さんも、最初に見るときがあったと思いますが、どんな感じだったのでしょうか。

○笹原氏　そうですね、一番最初に見たとき、触れたときは、まだ体温が少し残っている方でした。私たちがご遺体に会うときは死後24時間以上たっているので、低体温現象という身体が冷たくなる現象が起きますが、その方は体温があって、「あ、体温がある。人ってどうして死ぬんだろう。」と思いました。その３日後の夏の暑い日に、３日後ではなく２週間後でしたか、死後３週間という人に会ったんです。夏の暑い日で死後３週間って、どんな感じか分かりますか？

○質問４　多分匂いがすごいのかなと。

○笹原氏　そうです、当たりですね。腐敗すると、人は強いにおいを発しますから、復元の場合で一番大変なのは、においだったりします。その町の中も腐敗臭がすごく強かったですよね。私がすごく印象に残ったのが、人は亡くなると、こんなふうに変化をするんだということ。そして、その人の姿が３日間頭から離れず、近くの神社に行って、こう頼みました。「神様、どうか私の記憶をお空に持っていってください」と。そうお願いした新人の頃があります。でも、今は復元師になって、どんな状態の人でも、あ、この人は戻るなと、完成したお顔から考えていきます。そして、１つ１つのパーツを戻していく。最後に、トータルに思っていたのと違う部分の仕上げをしていくという時間の流れになります。ですから、レンタルビデオ

屋さんなどで、ホラー映画の表紙があるでしょう。あれをよく見る癖があります。それで、ここの腐敗の絵は違うぞ、いや、これは裂けたらこういうふうにはならない、など、つべこべ言って私のほうが怪しい、という感じになります。

でも、背景を知ることも大事なんです。その人はなぜそうなったのだろう。独り暮らしだったんだ。それから、独りを望んで、独り暮らしで発見が遅れる方もいるので、その人は十分に自分の人生を過ごされたと思いますし、その背景を知ると、どうしてもいとおしくなるんです。家族の元に帰りたい、家族に受け入れてもらいたいと、きっとご本人がそう思っているんじゃないのかな。そんなふうに思うと、先に手が動いていく。自然にさわっている、さわらせてもらえる。その時間は、ご縁をいただいている時間なのです。これだけたくさんの人たちがいて、今この会場の中でこうやって会っていることだって、もしかしたら奇跡と呼ばれることかもしれない。そんなふうに、今という時間を積み重ねていくことが、亡くなった人たちが、私たちに教えてくれること。当たり前に明日は来ない。

復元師の仕事をしていると、急死した方にもたくさん会います。だからこそ、大事な人に、今日お礼を言っておくのも大事。目の前の人が明日いる保証はないし、自分も明日いる保証はないと思って生きていくと、どんなに死後の姿が変わっていても、すごくいとおしくなります。家族のところに帰ろうねって。でも、新人の頃は、神様にお願いをしました。この記憶をお空に持っていってくださいという時代もありました。ですから、「見せませんよ、見られませんよ」と、言ってくれていた警察官が安置所の中ではすごく多かったです。見るとショックを受ける。対面されて嘔吐したり、気を失ってしまうご家族も非常に多かったですから。そういう意味では警察官も配慮してくれたと思います。そして、なぜ警察官が配慮してくれたか。その背景を考えると、警察官も家族を亡くしている被災者自身だったということです。人は深いですよね。

○質問４　もう一つ、お聞きしたいのですが、先程のNHKの番組のタイトルが「最期の笑顔」でしたが、「最期」の「期」は、「期末」の「期」、亡くなられた方々に使う「最期」だと思います。笹原さんご自身が、なぜ「最期」を使われたのでしょうか。

○笹原氏　これはこだわりました。「最期」の「期」はこの字だよと。「最後」という一般的な「後」を使うと切れてしまうような印象がある。でも「最期」の「期」、「期末」の「期」を使うと、その人の背景全てを含んでいるようなニュアンスが私の中にはあります。ですから死は終わりではなく、どうやってその人が生きてきていらっしゃったのかということです。NHKの番組は、特に命、死の部分を伝えてもらう内容でしたから。

例えば200人、300人の人が安置されている安置所もあった。安置所の中で、警察官といつも言っていたのが、警察発表で報道されます、「死者数が何千人になった、何万人になった」という内容は、実は1という字が積み重なって、10になり、100になり、1,000になっている。その1という数字に対して悲しんでいる家族がいるということ、それから1という数字の人生があったんだということにどれだけの人が気づいてくれているだろうと。先程の子どもたちのお父さんだったり、おじいちゃんだったりが、その1という数字の中に入っているわけですよね。だからその「死者数」という数の中の1というその数字こそが、実は人生そのものを表しているんだということを伝えてほしかった「最期」の「期」ということになります。

この「期」というのは、「末期の水」という、亡くなった人にお水を含ませてあげるんですけど、その「末期」の「期」でも使われる字です。そういう時間を大事にしていくというところで

す。背景を見ながらというニュアンスが含まれている。「末期の水」を調べてもいいのではないでしょうか？

以上